

平和の文化学習

南房総の歴史・文化財・戦争遺跡

●南房総文化財・戦跡保存活用フォーラム 愛沢 伸雄

●南房総・安房の地域的な特性とは

南房総は気候に恵まれた半島で、海や山など豊かな自然環境を育んできたことから、花・食・里山・黒潮など、第一次産業に関わる風土イメージのみで語られてきました。しかし、歴史的文化的な視点からみると、房総半島は日本列島のほぼ中心部にあって、関東を背後にもつ太平洋に突き出た半島として、太平洋世界（黒潮）の豊かな海洋文化を育み、人びととの交流をすすめてきた地域でした。そして関東での政権所在地であった鎌倉・江戸・東京から見ると、東京（江戸）湾の入口に位置する半島先端地域の南房総は、古代より戦略的な要衝の地と見なされていました。

この南房総の人びとの暮らしや生き方から地域の特性を考えてみましょう。まず台風や一時的な豪雨がある海洋性気候のもとで、人びとは植生的な特性を活かした農業形態を生みだし、なかでも花き栽培などに工夫をこらした花作り農業をおこなってきました。また古代から自力で海に潜って魚介類を採取したり、肥料や食として海藻を採集する磯根漁業、あるいは鯨やマグロなどと格闘し獲物を得る「突きん棒」漁など、地域に根ざした海洋文化をつくってきました。そして忘れてならないのは、環太平洋造山帯に位置した世界的な地震多発地帯のなかで、元禄地震や関東大震災などの大災害で破壊されても乗り越えてきた人びとの暮らしや生き方があったということです。

このような人びとの姿とともに、古代より中央政権や地域支配者は、太平洋に突き出た半島部が同時に東京（江戸）湾口部という地政的な位置に着目し、海上交易や軍事戦略の要衝にしたという歴史的な特性があります。南房総・安房に強い関心をもち、その重要性を認識した中央政権や地域支配者たちは、交易に関する施設や軍事施設だけでなく、交易や漁業に関する神社仏閣などを通じての地域支配のために数多く設置していました。

これまで中央政権や地域支配者の意図的な政策によって、文化財や史料が残されてこなかったとか、あるいは戦乱や地震・津波の大災害によって、多くの文化財や古文書が失われたことがあります。歴史的な出来事の痕跡が少なく、その事実も埋もれたままになっているなかで、数少ない古文書を再考したり、考古的な発掘や民俗学的な調査研究などによって、少しづつ解明されてきています。

●日本の歴史から南房総・安房を見る

古代から近現代の日本列島の歴史に関わる重要な事例を南房総の地から見いだすことができます。たとえば、館山市沼にある大寺山の舟葬墓は5世紀頃に海の豪族たちが船を墓として葬送したものだが、それまで埴輪だけで推定されていた墓が実際にあったという証明となり、軍事的な拠点に生きた海の支配者の姿を知る画期的な発見となりました。また、6世紀頃の巣崎から出土したと同じ鳳凰の冠頭大刀をもつ豪族が埋葬されていた翁作古墳や、景行天皇の伝承とともに忌部一族の移住から高家神社に関わる『高橋氏文』などの解釈を通じて、大和朝廷の東国支配のなかで、どんな役割を担って南房総・安房が拠点化されていたかを知ることができます。さらに、11世紀の房総半島の武士団の出現に関わる平忠常の乱や源平両家の関係、あるいは安房に丸御厨をもつ源頼朝が南房総・安房の武士の力を借りて再起を図り、鎌倉幕府の誕生につながっていった経緯から、この地域のもう歴史的な役割は決して小さいものでなく軍事的にも海上交易でも最重要拠点であったことを示しています。



源頼朝上陸の碑（鋸南町）

ところで、北条家紋の入った瓦が出土した全国初の萱野遺跡やそのことと関連する鎌倉諸寺、北条氏の莊園、その後所領を受け継いでいた足利氏や関東管領上杉氏の動きがあり、そのなかで登場してきたのが房総里見氏でした。15世紀中頃、鎌倉公方足利氏の側近として現れた里見義実は、関東管領上杉氏が支配していた房総太平洋沿岸や東京（江戸）湾口部の海上交易を奪うために、その拠点のひとつであった南房総白浜に入部しました。この頃、関東ではすでに応仁の乱の前段にあたって、鎌倉公方足利氏側と関東管領上杉氏が東西両派に分かれて享徳の乱という戦国期の幕開きとなる大争乱を始めています。実は江戸時代の人びとには、この頃起こった関東の大争乱のイメージが残っていたので、曲亭馬琴は『南総里見八犬伝』のなかで、

学習・体験の視点



里見氏稻村城跡（館山市）



稻村城跡ふかん図

その時代を舞台背景にしていったのではないかとの研究もあります。

安房国は鎌倉に近く、上杉氏との戦いの最前線であり、その拠点には稻村城や滝田城がつくられ、その後、南房総・安房から北上して房総半島全域の支配に乗り出していく戦国大名里見氏があったのです。そこに立ちはだかったのが、対岸三浦半島や伊豆半島で力をつけていった後北条氏でした。海上交易など東京（江戸）湾の制海権をめぐる里見と後北条の水軍などの戦いが、40年近く繰り広げられました。一時里見氏と後北条氏は和平策のなかで力を温存し、とくに後北条氏は上杉謙信などとの戦いを通じて関東支配を広げていったものの、最後は秀吉の支配に屈しました。一方、里見氏は秀吉や家康との関係のなかで源氏の流れをもつ外様大名として上手く立ち回ったが、17世紀初頭、軍事的戦略的拠点を支配し、強力な水軍をもった外様大名里見氏には、家康からさまざまな口実をつけられ改易されていったのです。こうして南房総は江戸幕府という中央政権の関係者が直接支配する地域となっていきました。



「元順号」日中友好の碑（千倉町）



館山城（館山市）

●南房総・安房から「平和の文化」の発信

幕末からアジア太平洋戦争までの近現代では、歴史的な出来事の痕跡が数多くあります。なかでも東京（江戸）湾口部にあったことで、対外政策上の軍事戦略では、東京湾要塞砲台群の施設をはじめ、さまざまな戦争遺跡があります。20世紀前半期は「戦争の世紀」といわれるが、この南房総はアジア太平洋戦争の軍事拠点をもつ東京湾要塞地帯として、館山海軍航空隊や館山海軍砲術学校、そして洲ノ崎海軍航空隊などが設置され、戦争末期にはこの地の住民たちも含めて、帝都防衛のかけ声のもと本土決戦体制が敷かれました。陸海軍のさまざまな特攻基地など、アメリカ軍の上陸を想定した7万人近い部隊を配置したなかで敗戦をむかえ、1945年9月2日に戦艦ミズーリ号で降伏文書が調印されると、翌日にはアメリカ占領軍が上陸し、館山は本土で唯一直接軍政が敷かれました。

戦後、軍都館山の人びとの戦争による傷跡は深く、市民たちは平和を求めていました。日本が国連へ加盟したのは1956年ですが、すでに1951年のユネスコ総会で日本は60番目のユネスコ加盟国として認められました。その背景には、1947年世界で最初に民間ユネスコ運動を始めた仙台ユネスコ協力会の結成があり、その活動が国際的に評価されたからといわれます。翌年には全国でも数番目、千葉県内では初めての館山ユネスコ協力会が設立され、地域から「平和の文化」をつくる運動が始まりました。そのなかで1951年、館山ユネスコ保育園を創設し、後に「ユネスコ」名を冠することは法律で禁止されたこともあり、世界でただ一つ「ユネスコ」がついた保育園が今もユネスコ精神で運営されています。

ユネスコ精神を平和学習に ～平和・交流・共生の地から平和を考える～

ユネスコは、第二次世界大戦の反省を踏まえ、国際理解教育の名で世界平和のための教育を立ち上げました。その基礎になったのがユネスコ憲章で、その前文にはこのように記載されています。「戦争は人の心の中で生まれるものだから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない」

国連は1986年を「国際平和年」にするとともに、ユネスコは国際平和会議を開催して、人間こそが平和をつくっていく主人公ととらえ、人間にに対する限りない信頼と希望を宣言しました。89年、「人の心の中の平和に関する国際会議」において、初めて「平和の文化」という概念が使用され、あらためてユネスコ憲章精神が見直されました。95年のユネスコ総会では「平和、人権、民主主義のための教育宣言」を採択し、97年国連総会決議によって、2000年を「平和の文化・国際年」と定め、翌01年から10年間を「世界の子どもたちのための平和と非暴力の10年」と決議しました。

「平和の文化」理念は、平和へのアプローチを人間中心において、「平和の砦」を築いた人間に平和の創造を期待しています。そして、生命の尊厳や人権尊重を基盤にした「平和の砦」を自らの心に築いた人間同士が連帯し合うことを求めています。国連総会が「平和の文化に関する宣言」を採択した際に、ユネスコでは世界に向けて「平和の文化」を築いていくとは、一人ひとりにどんなことを願っているかを「わたしの平和宣言」で示しました。

- ①わたしはすべてのいのちを尊敬します、
- ②わたしは暴力を拒否します／使いません／許しません／なくします、
- ③わたしはみんなと分かち合います、
- ④わたしはわかるまで耳を傾けます
- ⑤わたしは地球環境を守ります、
- ⑥わたしは連帯を再発見します／再構築します。

人権や民主主義を世界平和のキーワードとするユネスコ憲章の理念が生きた「平和の文化」社会の実現、つまり一人ひとりの心に「わたしの平和宣言」を築いていくための平和学習はどう活かされていくべきのでしょうか。

21世紀に入っても、世界を見ると貧困・飢餓をはじめ、経済的格差の増大や地球環境の悪化、そして人口

問題などが深刻化しています。さまざまな課題が地球的規模となり、世界の人びとが協働していかなければ、一国だけでは解決できない時代となっています。国家間に戦争がない状態が平和であるとの認識から、地球的規模の問題が解決されていくことなしには、結局、真の平和はないという認識が共有されるようになりました。貧困・飢餓や環境の悪化、人権侵害・抑圧など、人間が人間らしく生きることを妨げている社会構造を多角的に分析することで、さまざまな紛争や戦争の原因を探ることができます。同時に争いの火種は除去できるし、課題の解決への展望があることを示してきました。その希望を子どもたちに伝えていく役割が平和学習にあります。

一人ひとりの日々の暮らしや生き方に、地球的規模の課題を解決していく核心があり、「平和の文化」を築いていく基盤があります。「わたしの平和宣言」にある平和や人権を尊重する考え方や行動は、人間としてあたりまえのことであり、地域に生きてきた先人たちも願ってきたことがあります。自分が生きる地域に「平和の文化」の痕跡を見いだし、その歴史的な素材を活用した平和学習のあり方を探ってみましょう。

これまでの平和学習では、戦争の悲惨さを教えるために教材に工夫を加えたり、戦時中の遺品収集や戦争体験の伝承を取り上げてきました。それらのことは、戦争体験の継承を通して戦争の悲惨さを学び、平和の大切さを発信する人を育てていくうえで、大きな役割を果たしてきました。ただ「戦後60年」が過ぎ、戦争体験の継承という点で地域に住む体験者から「生きた証言」を聞く機会がなくなり、これまでの学習のあり方を検討する時期になってきました。



館山発祥の合唱組曲「ウミホタル」を歌う館山市民